第２部パネル　分科会 17

助け合いによる生活支援活動に対する寄付・遺贈などの意義と仕組みは何か

提言

寄付も遺贈も大切な「参加」。
さまざまな人々に合った
「参加の機会」を提供して、
託し信じ合える地域を作りましょう。

登壇者

【進行役】

早瀬　昇氏	(社福) 大阪ボランティア協会理事長
林　　省吾氏	(社福) 合志市社会福祉協議会地域福祉課
鵜尾　雅隆氏	(認定特非) 日本ファンドレイジング協会代表理事
髙橋　陽子氏	(公社) 日本フィランソロピー協会理事長
山田　健一郎氏	(公財) 佐賀未来創造基金代表理事
米田　佐知子氏	子どもの未来サポートオフィス代表

議事要旨　早瀬 昇氏

助け合いによる生活支援活動を行うボランティア団体が、寄付・遺贈などにより活動資金を集めるための具体策を探ろうと設定されたのが、本分科会。鵜尾雅隆氏（日本ファンドレイジング協会・代表理事）、髙橋陽子氏（日本フィランソロピー協会・理事長）、米田佐知子氏（子どもの未来サポートオフィス・代表）、山田健一郎氏（佐賀未来創造基金・代表理事）、林省吾氏（合志市社会福祉協議会地域福祉課・班長）をパネリストに迎え、早瀬昇（大阪ボランティア協会・理事長）が進行を担当した。

まず早瀬より、“頑張る人ほど疲れてしまう”ことが起こりやすいＮＰＯは、人々に「参加の機会」を提供し、ボランティアや寄付者と協働することによって自立的に運営できることを発題。阪神・淡路大震災時に寄付しなかった理由の１位が「呼びかけられなかったから」であったことをふまえ、待つのではなく、積極的に寄付を呼びかけることの重要性を指摘した。

次に鵜尾氏からは、近年の寄付の状況が報告され、特に高齢層で寄付への関心が高まっており、財産の一部を遺贈しても良いという人は約２割に達していることを報告。各地で遺贈相談を行う機関が連携して結成した日本レガシーギフト協会の活動も紹介した。

続いて髙橋氏からは、従業員・顧客参加の寄付や「年の数だけ寄付しよう」という誕生日寄付、それに募金や助成先選定に若者が関わる青少年のための寄付教育の取り組みを紹介。寄付者自身が自己肯定感を高められることの意味を解説した。

一方、米田氏からは、かつて事務局長として関わった神奈川子ども未来ファンドの取り組みを報告。寄付が子ども・子育てに関心を寄せ応援する機会を人々に提供し、その結果、応援者自身が“我が事”として活動に取り組む当事者意識の高まりが生まれる事例を紹介した。

山田氏からは、さわやか福祉財団の協力を得て生まれた市民コミュニティ財団の活動を報告。人口約80万人の県で累計5,000万円以上の資金が活動を支えた実績や生活支援コーディネーターも参加した研修会の取り組みが紹介された。

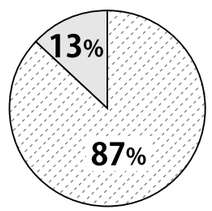
そして、林氏からは有償の助け合い活動で活動するたびに寄付が生まれる「安心生活（ぽっかぽか）サポート」の取り組みを報告。地元企業も協賛金を提供する協力会員として参加し、財源が乏しくなりがちな地域福祉活動を支える仕組みが紹介された。

その後の意見交換の中では、「寄付者が寄付の達成感を得る」ことや、寄付者をかっこいい大人として見せていくことの大切さなど、寄付や遺贈がさらに進むためのポイントが話し合われた。

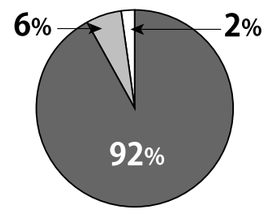
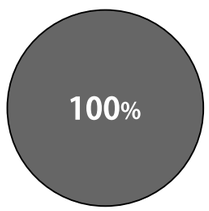
最後に「寄付も遺贈も大切な『参加』。さまざまな人々に合った『参加の機会』を提供して、託し信じ合える地域を作りましょう。」を分科会としての提言とし、この会を閉じた。

アンケートの結果　参加者概数：78名　回答者数：60名

回答者の所属先



助け合い活動をすすめる立場の方



その他の方